

space in modern architecture.

はじめに

これまでに多くの土地をおとずれて、多くの作品を見てきました。現地を訪れて優れた作品は、建築単体としてデザインが優れているのは当然であるが、その場所の特性を十分に読み取った作品であった。たとえば、見るべきものがほとんど無く、何の手がかりも無いような工場の一隅であっても、その場所の空間や可能性、気配の中に巧みに、また注意深く建築と植栽を置くことによって、工場に新たな空間を生み出して、働く人々に活力を与えているようにみえる。また、キャンパスに建つ校舎であれば、校舎の建つ場所の地形や植栽、学生や教師が集う人の自然な営みが、建築に呼応している。別の作品では、近代的な都市計画で作られた都市軸とも言うべき幹線道路の作り出すスケールと、元々の地元の住宅地のスケールの両者をどう取り合うのか、その回答に設計者の工夫が見られたりする。一方、これらを建築のプログラムの視点から見れば、工場の事務所であったり、校舎であったり、美術館であったり機能や形態など様々です。

一方で設計者の側から見れば、それぞれの作品には施主の都合や予算などの様々な条件が加わって、気が遠くなるような施主や住民・役所への説明のエネルギー、予算や技術との格闘など、設計者にとって戦いのプロセスがある。このようなプロセスを評価して作品を評価する考え方がある一方で、出来上がった建築の空間を冷静に時間を超えて評価する考え方も同時にあるのです。この時、建築はそれまでのプロセスとは切り離されて、建築が大地に根を下ろした瞬間から、極端に言えば建物を取り囲んでいた足場が外されてその姿を現した瞬間から、建築は大地に根づきはじめ建築と場所が共鳴を始めるのです。

建築の場所

場所のことを語るのに、C. N. シュルツの名著「建築の現象をめざして ゲニウス・ロキ」(加藤邦男、田崎祐生共訳)の中でローマ時代から「住まうためにおりあわなければならなかった『場所の霊』』として述べられている。詳しくは原本を読んでいただく

として、現代においても場所に宿るスピリッツは建築に色濃く反映されていることを説明します。

乱暴な表現を許していただけるのであれば、建築の近代性は場所や地域を色濃く反映していた建築から、これらの呪縛や桎梏を解き放つことを意味している。そして、世界中どこに行っても自由に同じボキャブラリーを駆使して建築を作ることが出来るのが近代建築であり、この自由性と解放性が人々に快適をもたらし、わずか70年ほどで地球上を覆う建築様式となった。これらの建築様式を打ち立てたマスター・アーキテクトは、その伝道師として活躍をした。ミース・ファン・デル・ローエは世界中どこであっても、ガラスと鉄の「ミース」の建築を作り、ル・コルビジェはコンクリートで建築を作ってきたのも事実である。そして、現代建築も依然としてモダニズムの枠組みの中にとどまっていることも否定できない。しかし、モダニズムの中にあって、建築家は場所とどのように向かい合ってきたかを、残されたスケッチの断片から読み取ってみます。

図1は、コルビジェがロンシャンの教会の設計を始めた1950年に、敷地を訪れたときに最初に描いたスケッチである。ほとんど丘の地形と気配が描かれていて、建築はほんのわずかに姿を示すに過ぎない。建築を彫塑的な造形力で扱いながら「住宅は住むための機械である」とか、「建築の五原則」の規範を掲げた作家でも、大地が放つ気配と自らの空間への感受性に抗しきれなかったのかもしれない。大変興味深いスケッチであるとともに、ロンシャンの教会は、いわゆるコルビジェの建築の原則とは外れることによって、最高の建築作品となったと見ることも出来ます。



図1 コルビジェのスケッチ